

6市区では500人以上となっています。とくに都市部では、多くの共育て夫婦が子どもの預け先を探すのに苦労しているのが現状です。

家庭だけではできないことを

「待機児童の問題について知ってはいたけれど、実際に保育園探しを経験して、初めてその厳しさがわかった」と言う野口さんに、当事者の立場から、今後どんな支援があればいいと思うかを尋ねると、こんな答えが返ってきました。

「『子ども手当』を受けることができ

の高い教育が受けられれば一番だと思うのですが…」

子連れで出歩ける環境に

また、野口さんは、子どもを連れて出かけやすい環境の整備にも力を入れてほしい、と言います。子どもを連れて歩く外の世界は、大人が一人で歩く世界とはまるで別世界。以前には気づかなかった不便や危険が随所にあり、どうしても気が重くなってしまうのだそうです。「一人だから何とかかなるけれど、もう一人子どもを連れて出かける気には、とてもなれない」。

最近では、駅や商業施設の中にエレベーターやオムツ替えや授乳のためのスペースも増えてきましたが、まだ、「子育てバリアフリー」とは言えないのが現状なのでしょう。

それはみんなに役立つこと

安心して子どもを預けられる施設が増え、学校教育が充実すれば、それは、次の世代の共育て家族にとっても財産になります。また、「子育てバリアフリー」の環境整備は、高齢者や、障がいのある人にとっての「バリアフリー」にもつながるでしょう。「個人や個々の家庭では解決が難しいこと」は、実は、「個人や個々の家庭だけでなく、みんなにとって役立つこと」でもあるのだと思います。それは、プレママ・プレパパたちが自然に「子どもを産み育てたい」と感じられる社会づくりにもつながることではないでしょうか。個々の家庭を直接支援する「子ども手当」とともに、保育や教育、物理的な空間のデザインなど、子育てをとりまく環境整備を社会全体ですすめていくことが大切なのだと思います。

(わしお・あづさ)

※この連載は、ヒューマンリソース研究所の中間真一主席研究員と鷺尾梓研究員が交互に執筆します

子どもの預け先を探すうちに

「実は、迷っているんです」と、野口さん。もうすぐ8か月になる長男をあやしなが、数か月後に迫る職場復帰への迷いを話してくれました。印刷関連の会社の人事部で出産直前までバリバリ働き、1年間の育休も「前倒して、できるだけ早く職場復帰したい」と言っていた彼女に、どのような心境の変化があったのでしょうか。

「子どもの預け先を探すうちに、『そこまでして働かなくてもいいかな』と思うようになったんです」。最寄りの保育園への入園がかなわず、認可外の保育園も含めて何件も見回っても、どこもいっぱい。比較的に入れる可能性が高いと聞いて訪ねたところは、駅から近く

て便利ではあるものの、野口さんの思うような保育環境ではなかったと言います。「ママ友仲間からは、『いまの時代、預け先が見つかるだけで幸せなのよ』と言われるけれど、そうは思えない。納得して預けられる先が見つからないと、安心して復職できない」と、悩んでいるのです。

厚生労働省の発表によると、今年4月時点の認可保育園の待機児童数は2万5,384人。前年から5,834人(29.8%)も増加しています。全待機児童数の約8割は都市部に集中しており、仙台市、世田谷区、横浜市、川崎市、名古屋市、大阪市の



ば、家計は助かります。子育てには思っていた以上にお金がかかるし、もっと大きくなれば教育費もかかるようになる。子どもが必要とするとき、必要なお金をちゃんと出してあげられるのかな、と考えると不安もあるので…。でも自分の家庭だけではどうにもならない問題、たとえば質の高い保育園を増やすことや、公教育の充実などの大きな問題にも力を入れてもらいたいです。まだ何年も先の話なのですが、息子より少し大きな子がいるママ友仲間の間ではもう小学校受験や塾通いのことが話題になっています。公立の学校で賃

「預け先が見つかるだけで幸せ」とは思えない… 納得して預けられる保育環境を整備してほしい!



鷺尾 梓 株式会社ヒューマンリソース研究所 研究員

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。2004年より現職。国内外における生活価値観調査をもとに、「働く」「学ぶ」「暮らす」といった生活の基本から、未来に向けたライフスタイル・社会のあり方を探求している。共著書に『男たちのワーク・ライフ・バランス』(幻冬舎リソース)。